

日米関係雑感

第一特別調査室長

まつい かずひこ
松井 一彦

今夏、横須賀市浦賀の愛宕山公園を訪れた。山頂から眼下を見下ろすと、辺り一面に浦賀湾の美しい景色が広がった。行き交う船を眺めながら、1853年（嘉永6年）7月に突如浦賀湾沖に現れた、米国海軍ペリー提督率いる4隻の黒船が人々をいかに驚かせ、不安を掻き立てたのか、しばし思いを馳せた。

その黒船来航から1世紀半が過ぎ、今年は163年目である。これまで日米関係は敵対と良好との間を絶えず揺れ動いてきたが、筆者自身の限られた経験からもそのことを感じる。1979年の初訪米時に滞在した東海岸の田舎町では、人々は日本人が珍しいのか、日本から来た若者に好奇心を持って接してくれた。その10年後の首都ワシントン滞在中では、日本関連の会議やセミナーも多く、存在感の大きさを感じる一方で、議会等で日本批判の発言もしばしば耳にした。98～99年のボストン滞在中では、日本の不況のせい、文化や歴史に特別な興味を持つような人を除き、日本について聞かれることが少なく、存在感のなさを実感した。しかし、今世紀に入り、特にこの数年間の米国各地での滞在中では、再び日本への注目度が上がっているのか、人々との会話の端々に日本への好意と興味を感じ取った。

日米間の往来を見ると、訪米日本人が年間約400万人とほぼ横ばいであるのに対し、訪日米国人は100万人を超えるなど、年々増加する傾向にある。先日、訪日した米国人を名所に案内しながら話をする機会があったが、伝統文化と現代文化の調和が醸し出す独特の美への感動に加え、街の治安の良さや清潔さ、人々の礼儀正しさ、更には豊かな食文化などに感心し、日本に一層興味を持った様子だった。今後、こうした機会は更に増えそうだ。

このように今日、日米関係は非常に成熟していると言ってよいが、先日、2016年度国際交流基金賞を受賞したハーバード大学スーザン・ファー教授の言を借りれば、全く異なる2か国がなぜ戦後強固な関係を築けたのかは、正に「日米関係の謎」である。

しかし、問題がないわけではない。国際化の進む米国の大学等では100万人近い留学生が学んでいるが、日本人は僅か1万9,000人強と年々減少傾向にあり、中国、インド、韓国等と比べはるかに少ない。西海岸のある名門ビジネススクールに通う米国人学生は、日本人学生と会ったことはないと言っていた。今日、世界情勢の不透明化などを背景に、日本は多くの困難な国際的課題に直面しているが、これらに適切に対応する上で米国等との情報共有や協力が不可欠となっている。そのためには留学生施策の強化により、米国の大学等の持つ優れたリソースの活用や人脈の構築を促進することも必要なのではなかろうか。

日本からも多くの目が注がれてきた米大統領選も間もなくフィナーレを迎える。「異色」と言われる候補者のうち勝利を手にするのは誰か。新大統領の就任後、米国の対外政策や日米関係はどうなるのか。あれこれ思いを巡らせながら、選挙戦の行方を見守りたい。